

『葬られた驚愕の古代史』—越智国に“九州王朝の首都”紫宸殿ありや—

松山市 合田洋一

序

拙書『葬られた驚愕の古代史』の「帯」には次のように記しております。

「私の研究対象は越智国という伊予国内の一角の単なる郷土史ではなかった。その中の幾つかの出来事は、実は通説の古代史を揺るがすものであった。つまり、越智国は我が国の主権国家であった九州王朝・倭国から近畿天皇家に政権移行するその渦中の真っ只中に在ったのである。それ故、現代に至るまで通説とされているものとは全く違うものになっていた。そこで、越智国を足がかりとして、闇に葬られてしまった日本の古代の姿をも明らかにしたいという思いからこの書をまとめ、読者諸氏に捧げたい。」

「“時のうつろい”に亡びぬ真実こそが万世最大のロマンである」—古田武彦—と願いつつ。

(1) 越智国に足跡のある天子・天皇

越智国（朝倉を中心に西条市・旧新居浜市・旧今治市）には舒明天皇・斉明天皇にまつわる遺跡・伝承が数多あります。舒明の行宮伝承地が4ヶ所、斉明は越智国に5ヶ所・隣の宇摩国に1ヶ所の計6ヶ所、そして越智国明理川に斉明の宮殿と考えられる「紫宸殿」地名遺跡があります。地名にも「斉明」があり、その地に「伝・斉明天皇陵」まであるのです。この地に遺る文献（『岡家文書』『無両寺文書』『矢矧神社御由緒』『橋新宮神社「旧故口伝略記」』『萬年山保国禪寺歴代略記』など）も両天皇にまつわる数多の記載があり、また寺社には「九州年号」が数多く遺っております。天皇と付く地名や寺社も30ヶ所（但し、牛頭天皇を含む）あり、伊予ではこの国以外の国々（野間・風早・和氣・久米・伊余・宇和）には両天皇の遺跡・伝承や九州年号などはありません（但し、幕末の書に“オラが故郷の想いから道後を比定するものあり）。

なお、『伊予国風土記』逸文所載の「温湯碑」の検証から、聖徳太子に擬せられた「天多利思北孤」の行幸地も越智国・氷見なかのすめらみことであり、通説の松山・道後温泉じよみょうではなかったのです。

(2) 九州王朝の天子・中皇命じよみょうの天子名は舒明、皇后は斉明さいみょう

七世紀中葉から後半にかけてのわが国歴史上の最重要人物であり、最もミステリアスな女帝・斉明に関して、古田先生の大胆かつ精緻な論証があります。

『紀』が語る皇極重祚斉明ではなく、皇極は大和の大王であり、斉明は皇極とは別人物で、白鳳年号時代の九州王朝の天子である。』（『古代に真実を求めて』第十五集「九州王朝終末期の史料批判—白鳳年号をめぐる—」—合田要約）

先生の論証が拙論の「越智国・斉明論」を裏付ける決定打となりました。言わば、単なる郷土史研究以上の“我が国の古代史の歪みを糺す”格段のお墨付きを戴いたことになったのです。

そのことから、『紀』が記す斉明の夫である舒明もまた伊予に5ヶ月滞在していることから推して、私は近畿の大王ではなく「九州王朝の天子」である、と『古田史学会報』No.132号で述べたのです。しかしながら、そこでの論証はまだ不十分でした。

ところが、古田先生の『古代史の十字路—万葉批判』を再読していて、「中皇命」が長期航海に出ていることを知り、この中皇命と舒明は時代も重なるので、この人物こそが『紀』に盗用され改作されたと考えられる「舒明」と同一人ではなかったか、と。

つまり舒明が九州王朝の天子であるならば支配圏の伊予に5ヶ月もの長期滞在（『紀』記載）をしても何の不思議はないと考えたのです。何しろ、近畿天皇家と越智国は“個別独立”に存在していて、九州王朝支配下の対等の国であるからです。そうであれば、近畿の大王がよそさまの国に5ヶ月も滞在して、行宮を4ヶ所も造るなどはとても考えられません。

ところで、『紀』にある和風諡号「息長足 日広 額尊」おきながたらしひひろぬかみことと後に名付けられたと言われる漢風諡号「舒明」ですが、越智国に遺る史書・伝承上の名前は全て「舒明」であることから、彼もまた同地に遺る「天子・斉明」と同じく、九州王朝の天子時代の名前と考えました。決して奈良時代に淡海三船が撰した近畿天皇家の漢風諡号ではありません。つまり、「舒

明」は九州王朝の天子時代の名前であり、「中皇命」は法王時代の法名であったと結論づけられます。そして、「舒明」と「斉明」は夫婦であったと思われるのです。但し、それを示す直接証拠は何もありませんが、二人とも同時代の人物であり、「舒明」の次代の天子が女性の「斉明」であったと考えられ、それに「中皇命」も「斉明」も同じく長期航海に出ていることがその一端です。一方、『紀』では近畿の「女王・皇極」と九州の「女帝・斉明」を合体させ、その上「舒明」と「皇極重祚斉明」を近畿の大王夫妻として記述しているのです。要するに二人とも盗り込んでしまったのです。『紀』は九州王朝を消し去るため、斉明だけではなく夫の舒明をも盗用したと考えます。つまり、中皇命＝舒明（田村皇子）を近畿の息長足日広額尊に、斉明（宝皇女）を近畿の天豊財重日足姫命（皇極）に合体させたのです（斉明の「宝」と皇極の「財」との合体の論証などは『古田史学会報』132号で詳述）。すなわち、『紀』は後世の漢風諡号とされた近畿の舒明・斉明天皇として、九州王朝の天子名をそのまま盗用し、はめ込んでしまったと考えます。因みに、越智国には天豊財重日足姫命や皇極の名前は一切ありません。なお、『紀』の合体の手法は、古田先生の論証である『三国志』「魏志倭人伝」に登場する邪馬壹国の女王・卑弥呼と姪の壹与の事績を併せて盗り込み、「神功皇后」という人物を特立したことと同じと考えます。

(3)「九州王朝」の終焉と新生「日本国」の成立

九州王朝・倭国と百済は、白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に完敗しました。その上唐の進駐軍が博多湾岸に駐留してきたのです。そのような状況下でも、九州王朝は終焉まで38年間も命脈を保っていたようです。

この時代、近畿天皇家は天智（中大兄皇子）・弘文（大友皇子）・天武（大海人皇子）・持統（鸕野讃良皇女）の各大王でした。なお、天武と持統の間に高市大王存在の可能性もあります（「長屋親王木簡」出土から）。そうであるならば、持統称制期間に該当しているかもしれません。

この間具体的には、中大兄皇子は近畿地方の実力者・蘇我氏を倒し、白村江の戦いにも参戦せず力を蓄えたのです。大海人皇子は「壬申の乱」（672年—『紀』）で大友皇子を害して、大王位を篡奪し、鸕野讃良皇女は九州王朝に替わり政権をほぼ掌握しました。それも、大海人皇子は唐の支援を受けての成就でした。次の軽皇子（文武）の大宝元年（701）に至り、新生「日本国」の成立となったのです。

ところで、天智と天武の兄弟関係、そして彼らの母とされている斉明天皇との関係、更に皇極天皇と斉明天皇の重祚問題など、不思議が多すぎるためこの動乱期の全体像が解りにくかったのですが、古田説「斉明は近畿天皇家の大王ではなく、九州王朝の天子だった」にて解決の糸口が開けてきました。九州王朝と近畿天皇家の関係が次第に解ってきたのです。そこに、降って沸いたように越智国の「紫宸殿」地名遺跡（74、800平方メートル）がクローズアップされてきました。また、この隣接地に広大な「天皇」地名（81、000平方メートル）が存在していることを考えると、もしや天子の住居ばかりでなく政庁もあったのではないか、と思えるのです。

なんとこの帰結は、ここ越智国明里川が「九州王朝・倭国の首都だった」という命題が出来ました。但し、なにぶんにも遺構の発掘はまだであり、仮説の域は出ないことはいうまでもないので、早々の発掘・調査が待たれます。

しかしながら、仮にこの地が首都だったとなると、ここに九州王朝の天子・斉明がおり、太宰府には唐から帰還した九州王朝の摂政で都督・薩夜麻がいて、近江には近畿天皇家の大王・天智が居るといふ、日本国内三重構造の政治状況が在ったこととなります。

さて、明里川と太宰府は敗戦のどん底状態に喘いでいたと思われそうですが、近畿の天智天皇家は戦いに参加していないので無傷でした。従って、天皇家は益々強大になったようです。それを九州王朝の大皇弟（天子・斉明の弟）・大海人皇子（のちの天武）が篡奪したのです。

この“巡り合わせ”は複雑怪奇この上ないものとなりましょう。そして、天武・持統政権が行ったことは、

（イ）儒教思想を受容するため「易姓革命」のそしりの回避。

(ロ)「天皇家一元史観」を成立させるため、「万世一系」の系図を作成した。

(ハ) 唐進駐軍の司令官・郭務悰の庇護の下に成立した王朝であるので、唐に配慮して「敵対した者達に鉄槌を加えた」。

これにより実家の九州王朝や、この時代の行政区画は「評」になっていましたが、かつての地方の国々を“なかった”ことにしたのです。何とも凄い政治状況をかもし出したこととなります。これこそが「葬られた驚愕の古代史」でした。

(4) 王朝交代は禅譲か放伐か

ところで、倭国の「白村江の敗戦」から新生日本国成立の大宝元年(701)に至る“国家(王朝)交代の闇”についても触れておきます。この38年間に政権移譲がどこでどのようにされたのかさっぱり解らないのです。この肝心要のことが良く解らないのでは、拙論をお聞きになる皆様方には、消化不良になるものと思われまます。

この間の出来事について古田先生は縷々論述されておられますが(『古田史学会報』101号「九州王朝末期の史料批判—白鳳年号をめぐって—」)、その後の王朝交代に至る最終の顛末、「禅譲か放伐か」などについては、あまり深入りした論述はされていません。これについては古田学派内でもしばしば論争になっていました。しかしながら、これを論ずる確たる史料もありません。何故なら、この時代の唯一の史書である『紀』は、「九州王朝」を“なかった”ことにして、その痕跡を消すことが目的でもあるからです。しかし、“国家(王朝)交代”に伴う禅譲・放伐の問題は、極めて重要な課題でもあるので、これについて推測の域を出ないことをお断りして述べることにします。

まず、この間「九州年号」が続いていることから、政権としては曲がりなりにも九州王朝・倭国が存続していたことは間違いありません。それでは、この年号発布は一体どこで誰によって行われたのでしょうか。「白鳳年号」(661~683)は古田説に従えば九州王朝の天子・斉明の年号であり、斉明は太宰府で改元し、その後越智国で崩御していることから、この年号に関しては問題ないと考えます。ですが、次の「朱雀」(684~685)、「朱鳥」(686~694)、そして「大化」(695~701、古賀達也氏説は703年まで)年号は、どこで誰によって発布されたのかが不明なのです。太宰府か或いは越智国の紫宸殿か。それも、当時『紀』にある氏名として、唐に捕虜となっていた筑紫君薩夜麻(古田説は斉明の摂政)が帰還したことから(持統4年<690>但し、正木裕氏は筑紫都督として天智十年<671>帰還したとしている。『紀』に「筑紫都督府」の記事あり)、斉明亡き後、彼が天皇(唐に対する配慮から天子の格下称号)または都督になって発布したことも考えられます。しかし、他に該当する人物が不明であることから、九州王朝の最晩年が全く見えてこないのです。一方の近畿天皇家はどうなっていたのでしょうか、拙論のおもむくところを以下に述べます。

九州王朝の「大皇弟」たる大海人皇子が、近江国大津に在った近畿天皇家の天智に婿入りしてのち、後継者争いから天智を亡き者にした上、「壬申の乱」でその子大友皇子をも殺し天皇家を篡奪しました。

そして、筑紫の小郡の飛鳥浄御原宮(遠つ飛鳥)で、郭務悰(唐の進駐軍司令官)と胸形君徳善(義父で宗像大社宮司)や大分君恵尺(豊国の大豪族)を後ろ楯として「近畿天皇家」の大王として即位したのです(672年—古田説)。

その後、再び近畿に戻り、難波にあった“何らかの施設”を大改築して、現在に遺る「前期難波宮」に遷都したと考えます(遺構の全容は孝徳朝時代<645年>からのものかはわからない)。

なお、前述しましたがここには天武亡きあと長子の太政大臣高市皇子が大王として君臨していた可能性もあります。次いで、天武の後・持統が藤原不比等らと語り、持統の実子でない高市大王の都をさらったか「藤原宮」に遷都(694年)したのです。『紀』の天武紀・持統紀は、当然のことながら、日本国の主権者としての立場から、彼らの政権運営について事細かく記述しています。そこには、九州王朝・倭国からの“政権移譲・篡奪”にかかわることについては、その“気配”を感じさせない記述となっています。

この時点での倭国は、越智国の明里川を首都に、また太宰府は都督府として、名目上主権がまだあったのです。これらのことから推すと、この時代は正に「三極(権力)分立」

の時代、つまり「三重構造」の政治状況を呈していたこととなります。

ところが、越智国「紫宸殿」の主・斉明亡きあと、誰が天子になったのかは全く不明であり、この地の史書上にも名前がありません。さすれば、斉明一代限りであったことになります。三極内のこの一角が最初に消えたものと考えられます。

また、太宰府の都督府も薩夜麻のあとの人名が不明です。しかしながら、前述のように年号が「朱雀」・「朱鳥」・「大化」と続いていることから誰かがここに君臨し、この地で発布されたことは確かです。但し、残念ながらこれ以上のことは解りません。

ところで、孝徳大王の「大化の改新」(645年)ですが、事実は九州年号「大化」(695~701年)時代に発布した詔を、50年ずらして『紀』の「孝徳紀」にはめ込んだことが古田先生により明らかにされています。

それでは、この詔は一体どこで誰が発布したものでしょうか。思うにこれは、近畿の藤原宮で、持統政権下の藤原不比等らによって“王朝交代”の“布石”として、「大化の改新の詔」(646年時のもの全てかどうかは解らない)として「大宝律令」に先駆けて発布したものとされます。

そうしてみると、「壬申の乱」(672年か)以降の国内の政治状況を鑑みた場合、九州王朝から近畿王朝への“王朝交代(政権移譲)”には、28~29年ほどの年月を要したものの大宝元年(701)までは目立った争乱も見られません。そこで、王朝交代は“禅譲か放伐か”となると、敢えて言うならば禅譲と言えるかも知れません。それも、中国史にしばしば見られるような“形の上だけの禅譲、実質は篡奪”に近いように思われます。それができたのは、なにぶんにも天武は九州王朝の「大皇弟」だったことと、唐の「郭務棕の庇護」があったればこそではないでしょうか。

ところで、そののち薩摩・大隅国で起きた「隼人の乱」(702~713年)ですが、これは九州王朝の残党が起こしたと言われており(「大長年号」<704~712>を建てる)、全てがすんなり王朝交代とはならなかったようです。伊予でも国司(百済王・良虞)が赴任できたのは大宝3年(703)であることから、越智国は天子・斉明の「紫宸殿」が在った地であり、それなりの抵抗があったと思われます。何しろ、越智国は地下資源(鉄・銅・マンガン・白金・朱・丹)が豊富で、島嶼部での塩の生産もある富める国で、『日本霊異記』や『予章記』によると「白村江の戦い」に5千人も派兵しており、また「永納山古代山城」をも築城していた強国だったので。

最後に一言述べさせていただきます。それは、古田先生の論証である「『紀』が語る皇極重祚斉明ではなく、皇極は大和の大王であり、斉明は皇極とは別人物で、白鳳年号時代の九州王朝の天子」について、「古田史学の会」のお歴々はこの論証の存在を全く“無視し“持論展開をするのです。言うまでもなく、「古田史学の会」は古田先生の学問を研究する会ですから、批判して論述するのならば結構ですが、それが無いのが残念です。

以上、時間の関係上拙書『葬られた驚愕の古代史』の一部を述べました。詳しくは拙書をご高覧賜りますようお願い申し上げます。ご清聴誠にありがとうございました。